

「第二十九回庭野平和賞」贈呈式 名誉会長ご挨拶

本日は、「第二十九回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、（主な来賓の名前を挿入）をはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、グアテマラの「コナビグア（連れ合いを奪われた女性たちの会）」の共同設立者であられるロサリーナ・トゥユク・ベラスケス氏にお贈りできることは、当財団にとりまして大変光栄なことであります。

ロサリーナ氏は、マヤの伝統と精神性を基盤として活動しておられます。庭野平和賞が、こうした先住民の精神文化を背景にした実践者に贈られるのは、初めてであります。二〇〇四年、私は、「第十九回庭野平和賞」の受賞者であるサミュエル・ルイス・ガルシア師の招待を受け、メキシコのチアパス州を訪れております。グアテマラに隣接するチアパス州では、インディオの人々と交流し、先住民の権利が不当に阻害されている状況を目の当たりにしました。その地に代々伝わる貴重な精神文化と、それを継承する人々の生活が、政治的な思^{おも}わくによつて抑圧される構図は、グアテマラと共に通するものであります。

現地を案内してくださったガルシア師は、残念ながら、昨年一月、ご逝去されました。ご冥福をお祈りする次第であります。

ロサリーナ氏の活動につきましては、先ほどもご紹介がありましたし、パンフレットにも概要が記されております。

ロサリーナ氏は、長年におよぶ内戦や軍事政権の弾圧で夫を失った女性たちと連帯し、相互扶助による救済や経済的支援に尽力しておられます。とりわけ「コナビグア」は、先住民の女性たちが、悲しみを分かち合い、社会の情報を得、自らの権利を学び、次第に自信を深めていく重要な役割を果たしました。

ロサリーナ氏ご自身、お父さまとご主人を殺害されています。どれほど悲しく、苦しい思いをなさつたか想像に難くありません。しかし、ロサリーナ氏は、怨みや憎しみの情に突き動かされることなく、非暴力によつて社会を変えていく道を選択されました。そして、同じ境遇にある女性たちに寄り添い、目の前の課題を一つ一つ改善してこられました。

仏教では、「同悲同苦」「自利利他」が菩薩の精神であると教えています。まさにロサリーナ氏に菩薩の姿を見る思いが致します。改めて、称賛の拍手をお送りしたいと存じます。そして、もうお一人、皆さまにご紹介したい方がいます。今回、ロサリーナ氏に随行し、通訳をしてくださつている石川智子さんです。石川さんは、グアテマラに渡り、ほぼ二年間、「コナビグア」の活動を支えておられます。同じ日本人として、心から敬意を表したいと思います。

冒頭、私は、ロサリーナ氏の活動は、マヤの伝統と精神性を基盤にしているとお話ししました。「コナビグア」が、非暴力による社会変革を目指していることも、マヤの教えが深く関係していると伺っています。

マヤ民族の言葉で「平和」とは、「周りのあらゆるものと調和し、バランスを大切にして、正しく暮らす」ことであるといわれています。また、全ての信仰、この世のあらゆる存在を、敬意の対象としています。従つて、暴力や破壊は、当然排除拒絶すべきものとなるのであります。

日々の生活では、食物や水、空気など、わが身に受けるものに感謝し、それに報いる生き方を志向しています。ここにさ

これらは、マヤの教えのごく一部であり、正確さを欠いている点もあるかもしれません、しかし、現代の世界に蔓延している「自己中心性」や「弱肉強食の価値観」と対極にすることは確かであります。

こうしたマヤの伝統的精神性があるからこそ、たとえ自分たちを抑圧する側の人とも、根気よく対話し、平和的な手段で問題解決を図っていく歩みを続けておられるのだと思いません。

私は、仏教徒として、マヤの教えには、共感する点が少なくありません。例えば、仏教の中心をなす「縁起」の教えがあります。例えてみれば、無量・無数の縁、つまり他の大きな力によつて、いま自分が、ここに存在しているということです。「自分」という言葉そのものが、「自」は独特・独自の自であり、「分」は全体の中の一部分を指します。生きているというより生かされているということが、「縁起」の法の大重要な意味合いと言えるでしょう。その自覚から、無限ともいえる恩恵に感謝し、他と調和して生きることを大切にします。

また日本は、上代に国名を「大和（やまと）」と定められ

たことがあります。「大和（やまと・だいわ）」は、「大きい平和」「大きいなる調和」を意味します。我々の祖先は、このことを国づくりの礎としてきました。

インドのマハトマ・ガンディー翁は、次のような言葉を残されています。

「一樹の幹はただ一つであるが、枝や葉は多数であるように、真正且つ完全なる宗教は、ただ一つに過ぎないけれども、それが人々の仲介によつて多数となる。唯一の宗教は、言葉の範囲外にある」と。

あらゆる宗教や精神文化の根底には、言葉を超えた共通の価値観があることを、マヤの教えを通して、改めて思い知られます。

未来を築くには、新たな発想や見識が必要であります。しかし、マヤの人々が、数千年にわたつて伝統を大事にし、そこから問題解決の道を見出してきたように、歴史・伝統の中に、より良い未来への智慧が宿されていることが多いように思えます。

日本は、明治以降、西洋の科学文明を積極的に取り入れ、国民の間に根づかせてきました。その消化力・包容力は、日本人独特のものであり、今日の経済的な発展の土台となつたことは事実であります。

しかし、昨年の東日本大震災によつて、深刻な原発事故が起こり、わが国は、経験したことのない大変な試練に立っています。物質的な豊かさや便利さの文明を追い求めたツケが回ってきたという厳しい意見も聞かれます。

マヤの人々と同様に、もともと東洋には、「古きを温ねて新しきを知る」という思想文化があります。そうした智慧を

尋ねて、今一度、自らの生き方を問いかねることが、今、わが国に最も必要なことと申せましよう。

「コナビグア」の活動は、世界的な評価を受けていますが、現実には、課題が山積していると伺っています。いやがらせや妨害を受けることもあるということです。しかし、先住民の女性たちが、問題解決に向けて、自ら立ち上がった事実は、将来、必ず大きな花を咲かせ、実を結ぶものと信じます。いのちを宿し、育て、慈しむ女性としての特性を活かし、今後も一層ご活躍くださることを願ってやみません。

本日の贈呈式を契機として、ロサリーナ氏の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、また「コナビグア」の活動が一層発展することを祈念して、挨拶と致します。
ありがとうございました。